



京機短信

KEIKI short letter

No.364 2022.02.05

京機会(京都大学機械系同窓会) tel. & fax. 075-383-3713

E-Mail: jimukyoku@keikikai.jp

URL: <http://www.keikikai.jp> 編集責任者 吉田英生

目次

- ・ series わたしたちの研究 (11) 熱システム工学研究室……岩井 裕・岸本将史 (pp. 2-11)
- ・ series わたしの仕事 (38) 東北大学工学研究科(教員)……松隈 啓 (pp. 12-20)
- ・ 連載「水彩スケッチ紀行」(7)……下間頼一 (pp. 21-22)
- ・ 京都の散歩道 (12): 李登輝さんと彭明敏さん——台湾民主化の二人の父……編集人 (pp. 23-29)
- ・ S42卒オンライン同期会……藤川卓爾 (pp. 30-33)
- ・ 時計台の煉瓦模様——八芒星(Octagram)は隠れたオシャレ?……編集人 (p. 34)



2015年1月6日(火) 雪が降ると金閣寺に積もっているかな?・・・と、金閣寺のライブカメラを見ます。この冬の初雪の日の金閣寺です。日が照ると融けだすのも早いから、早いうちにと出かけました。雪が積もると嬉しくなって、金閣寺には何度も出かけていますが、雪の積もり具合は多過ぎもせず、ちょうどいいくらい。 ©京都を歩くアルバム <http://kyoto-albumwalking2.cocolog-nifty.com/>

「雪は天から送られた手紙である」の言葉で有名な中谷宇吉郎(なかやうきちろう 1900-62)は石川県の片山津温泉出身で、四高から東京帝大に進んで寺田寅彦の教えを受け、理化学研究所を経て1930年に北海道帝大に異動します。しかし、理学博士号はなんと1931年に京都帝大から受けています。といっても、1928年に留学したKing's College, Londonで行った研究でProc. Royal Society A (July 1929)に掲載された論文 *On the emission of soft X-rays by different elements, with reference to the effect of adsorbed gas* <https://royalsocietypublishing.org/doi/10.1098/rspa.1929.0142> のタイトルそのまま、審査されたようです。

京都の散歩道 (12) 李登輝さんと彭明敏さん——台湾民主化の二人の父

中華民国(以下、台湾)は、面積約36,000 km²で九州とほぼ同じ、人口約2,300万人で日本の約5分の1(なお近畿2府4県で約2050万人)です。一方、中華人民共和国(以下、中国)は、面積約9,479,000 km²、人口約14億人ですので、台湾は中国に対し、面積で約260分の1、人口で約60分の1と小さい国といえます。しかしこのような表面的な数字とは異なり、台湾は大国中国と同様に世界の中で重要な位置づけにあります。政治面では言わずもがな、経済・産業面でも世界最大のファウンドリ(半導体デバイスを生産する工場)は、台湾積体回路製造股份有限公司 Taiwan Semiconductor Manufacturing Company, Ltd. TSMC。昨今の半導体不足による自動車生産への影響でも顕著なように、TSMCは世界経済に与えるインパクトが極めて大きく、熊本には2024年の稼働開始をめざしてTSMCの工場誘致が決定しています。

そのようなTSMCに象徴される現在の台湾の民主化と発展の基礎を築いた二人の父——李登輝(りとうき Lee Teng-hui, 1923.1.15–2020.7.30)さんと彭明敏(ほうめいびん Peng Ming-min, 1923.8.15–)さん。李さんに関してはよく知られていますが、彭さんに関しては、筆者の知る限り、日本語の本も本稿で紹介する本以外にほとんどなくWikipediaでもほんの僅かな扱いです。実は、筆者も最近上梓され極めてインパクトに富んだ2冊

(李1)河崎眞澄、『李登輝秘録』、産経新聞出版(2020.7.31: 逝去翌日)

(彭1)近藤伸二、『彭明敏』、白水社(2021.5.30)

をセットで読むまで、恥ずかしながら、彭さんについてはまったく無知でした。京大関係者なら李さんは同窓の意識も強くご存じだと思いますが、彭さんも三高卒業後に東京帝大に進んだので京大に縁があるといえます。もとより筆者は台湾の歴史や政治に詳しいわけでもありませんが、上記2冊から学んだ知識に基づき、ごく基礎的な事実だけではあるものの、まとめてみたいと考えました。なお、李さんの方は逝去後も

(李2)李登輝、『愛する日本人へ——日本と台湾の梯となった巨人の遺言』、宝島社(2020)

(李3)早川友久、『総統とわたし——「アジアの哲人」李登輝の一番近くにいた日本人秘書の8年間』、ウェッジ(2020)

(李4)李登輝、『台湾の主張 [新版]』、PHP文庫(2021)

などの本が発行されています。一方、彭さんに関する和書も同様に追加したいと



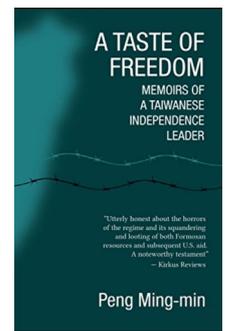
2020.7.31発行

2021.5.30発行

ころですが、彭さんに直接関係する和書は以下に示す1970年代の2冊程度に限られるようです。

(彭2) 彭明敏・黄昭堂¹、『台湾の法的地位』、東京大学出版会 (1976)

(彭3) 彭明敏、『自由台湾への道——新時代の旗手・彭明敏自伝』、社会思想社 (1996)、ただし原著は古く Peng, Ming-min, *A Taste of Freedom: Memoirs of a Taiwanese Independence Leader* (1972)



台湾といえば、まず思い浮かぶのは蒋介石（しょう かいせき、Chiang Kai-shek、1887–1975）と、その子である蔣経国（しょう けいこく、Chiang Ching-kuo、1910–1988）ではないでしょうか（蒋介石については以下の本など）。

(蔣1) 阿川弘之²、『蒋介石の死』、正論 (1975) [阿川弘之全集第十七巻、pp.34-35、新潮社 (2006)]

(蔣2) 保坂正康、『蒋介石』、文春新書 (1990)

(蔣3) 関榮次、『蒋介石が愛した日本』、PHP新書 (2011)

日本がポツダム宣言を受諾した1945年8月14日、蒋介石は『抗戦勝利にあたり全国軍民および全世界の人々に告げる演説』で「怨みに報いるに怨みをもってせず」——「以德報怨」と述べたことはよく知られており、筆者も学生時代に祖父宅に居候した際、このことを祖父から感慨深く教えられました。阿川さん^(蔣1)も

敵国元首のこの言葉に私は深い感銘を受けた。それは、スターリンもチャーチルもトルーマンも毛沢東も口にしなかった言葉で、むしろ、勝者の立場に在った時代の日本に、さういふことを言った政治家は一人もいなかった。

と書いています。

爾来、筆者には「蒋介石は徳ある軍人」というイメージが強かったのですが、戦後の台湾について勉強すると、評価は正反対になりました（蒋介石神話）。外省人（戦後、蒋介石の国民党政権とともに中国から台湾に移ってきた人々とその子孫）が本省人（戦前からの台湾住民とその子孫）に対して1947年2月28日に暴行を加えたことに端を発する「二・二八事件」や、1987年7月の解除まで続く「白色テロ（李さんによると、犠牲者は三万人を下らない）」などの独裁・恐怖政治が行われました（省籍矛盾：少数で支配層の外省人と、多数で被支配層の本省人との対立）。1975年4月、蒋介石の死のあと総統を継いだ息子の蔣経国（最初の夫人で不遇だった毛福梅の子であって、3番目の夫人で華やかにニューヨークで105歳まで生きた宋美齡の子ではありません）は人望も厚かったようですが、蒋介石時代の国民党がもたらした負の遺産は色濃く残っていました。



¹ 黄昭堂 (1932–2011)、昭和大学名誉教授、台湾独立建国連盟主席 (1995–2011の16年間)。

² 阿川弘之 (1920–2015)、「日本李登輝友の会」名誉会長でもありました。

そのような台湾を、異なる立場から、時に離れて時に近く先導したのが李さんと彭さんであるといえます。李さんは一昨年97歳で逝去されましたが、彭さんは98歳の今もご健在だそうです。お二人の実に百年近い波乱の人生と偉大な仕事を的確にまとめることはとても困難ですので、以下では年表の形で整理することにし、ご関心のある方はぜひとも河崎さんの本と近藤さんの本をセットで読んでいただきたいと思います。



2ページあとの年表をもって本文の結びとしますが、その前に若干の補足説明を挿入しましょう。

○1895年4月17日に日清講和条約（日本では下関条約、中国では馬関条約と呼ぶ）によって台湾が清朝から日本に割譲され、ポツダム宣言後の1945年10月25日まで日本の統治が続きました。台湾ではこの約50年間の時代を「日據(拠)」あるいは「日治」と呼びます。教育関係では、1922年に旧制台北高等学校（余談ながら「次郎物語」の下村湖人が校長を1929–1931に務めてもいることに今回気付きました）、1928年に台北帝国大学（現在の国立台湾大学、初代総長は幣原坦で、戦後に総理を務めた喜重郎の兄）が設立され、戦後は日本の帝大の学生は無条件で台湾大学に編入できました。李さんも彭さんもそのケースです。

○ここで、李さんと彭さんの対照的な人生が的確に要約されている近藤さんの文章を、少し長くなりますが(彭1)から引用します。

戦前、東京帝国大学で学んだ彭明敏は、日本の敗戦に伴って台湾に戻り、台北帝国大学を引き継いだ台湾大学に編入する。卒業後、同大学で研究者生活をスタートし、カナダとフランスへの留学も経て、若くして国際的に名の知れた法学者となった。そんな本省人エリートを蔣介石総統が率いる中国国民党（国民党）政権は重用した。権力に逆らわなければ、彭明敏は恐らく、李登輝より先に本省人として初の総統となっていたであろう。それなのに、蔣介石の「大陸反攻（中国大陸に攻め入って取り戻す）」という虚構を暴き、独裁体制を厳しく指弾する「台湾人民自救運動宣言（自救宣言）」を作成し、反乱罪容疑で逮捕される。特赦で自宅に戻ってからも軟禁生活が続いたが、綿密な計画の下、厳重な監視の目をかいくぐって海外に脱出した。そして、長く米国で台湾の民主化と独立運動に打ち込んできた。（中略）一方、彭明敏と同じ年に生まれた李登輝も、戦前は京都帝国大学に籍を置くエリートだった。彭明敏とは台湾大学時代からの友人だったが、国民党の懐に飛び込み、内部から改革するやり方を選んだ。ともに日本統治時代の台湾で生を受け、日本の帝国大学に進んだ二人は、最高指導者と海外亡命者という正反対の人生を歩んだのである。

○李さん自身の言葉でとりわけ印象深いのは、文献(李4)の中で述べている次の一節です。

歴史はさまざまな屈折と逆説に満ちているようにみえるが、それはおそらく必要だった過程なのである。大きな視点で見れば、歴史に逆行しているとされていたことも、私たちのい

まを支えている。私は蔣介石と蔣経國二人の先人たちの功績は、大変偉大なものだと思っている。そして私たちは、その基礎の上に立ってこれからの政治を模索していけばいいのである。先人たちに学ぶことなくただ批判するのも間違いであり、また「李登輝、お前は先人たちと違うことをしているから間違っている」というのもおかしなことなのだ。

この言葉は日本の本を生涯最も尊重し膨大な読書を重ねた哲人でもある李さん（旧制台北高校時代には岩波文庫だけで700冊以上も所有していたそうですし、[\(李3\)](#)によると「作家で李登輝夫妻の親友だった司馬遼太郎氏の記念館の書庫を私も見たことがあるが、李登輝の書庫も負けていない」）の深い思索（キーワードはアウフヘーベン＝止揚）に基づいていると思います。

○李さんの京都帝大時代に関する記述は多くの本にありますが、彭さんの三高時代のことは文献[\(彭3\)](#)くらいしかありませんので、いくつか以下に引用します。

- ・私は、〔編集人挿入〕関西学院にわずか一年学んだだけで、二つの名門校、すなわち慶應大学経済学部と三高に合格したが）ためらうことなく三高へ進んだ。神戸から京都へ引っ越した私は、人生の中で最も幸せな時代を過ごすことになった。三高は「自由」を教育方針としていることでよく知られていた。私が入学した頃、学校は、この自由の伝統を守るために戦っていた。

- ・学校と教授たちは、自分たちや生徒のために、最低限の「知と個人の自由」を守ろうと必死に頑張っていた。

- ・私は本を買い漁り、高校生には不相応なほどの蔵書ができた。ある日、吉田神社の境内を散歩している時、ふと大きな高揚感を感じた。この時が人生で最も幸福を感じた瞬間と言える。というのも、私には何の心配事もなく、ただ好きな本を買ってあればよかったからである。私は、恐いもの知らずの十七歳の少年だった。

- ・教授陣のなかに、土井〔編集人挿入〕虎賀壽 どれとらかず、1902-1971）という哲学科の教授がいた。彼は個人主義者であり、軍部政権に対し無言の批判を貫き、服装や言動に無頓着な姿勢をもって、物心両面に対する統制政策に反旗を翻していた。彼の反抗精神は、私たちにも伝わり、生徒からも尊敬されていた。

- ・私の心理学の教授は（中略）不意に、一番興味のある話題について、心の中にあることを思ったままに正直に文章にするように言った。教授は文章を秘密にすると約束した。そこで私は、中国侵略を非難する作文を書くことにした。（中略）数日後、教授から部屋に来よう呼び出された。彼は声をひそめると、私の意見を決して口外しないことを約束し、同時に当時の情勢に深い憂いを見せた。教授は、「この意見は自分の胸にしまって、誰にも話してはいけないよ」と注意してくれた。

○李登輝さんと彭明敏さんは以上のような立場の違いがありながらも、お互いを尊敬し、1996年の総統選で対決したときも、相手の党は批判しても個人的には批判は抑制したという「君子の争い」が語り継がれているそうです。戦後の国民党支配による台湾の不幸は大きいですが、そんな中であって、このような学識と見識と信念に満ちた二人の指導者を仰ぐことができたことは、不幸中の幸いであると思います。

年表

李 登輝 (藍色は国民党のカラー)	彭 明敏 (緑色は民進党のカラー)
1923.1.15 誕生(日本名: 岩里武則)	1923.8.15 誕生
1941.4 台北高等学校入学	1940 三高入学
1943.10 京都帝大農学部入学 柏祐賢助教授(当時の) 「北支の経秩序」に強い影響を受ける	1942 東京帝大法学部入学 旧日本軍への服役義務はなかったが志願拒否
1943.12 旧日本陸軍に志願して入隊	1945.4 長崎で敵機襲来に遭い、左腕を失う
1945.8 日本敗戦、李登輝は陸軍除隊	1945.8 長崎で原爆投下に遭遇
1946.4 台湾大学農学部編入	1946.1 台湾に帰国
	1946夏 台湾大学法学部に編入
1947.2.28 二・二八事件	
1948.8 台湾大学卒業、農学部助教に就任	1948夏 台湾大学法学部を卒業し、同学部助教に就任
1949.10 北京で中国共産党政権の「中華人民共和国」が成立 1949.12 蒋介石と国民党政権の「中華民国」政府が台湾に移る	
1952.3 米・アイオワ州立大に留学(後にノーベル経済学賞 1979を受賞するセオドア・シュルツがいた)	1951 カナダ・マックギル大学に留学(1953修士号取得)
1953.4 修士号取得、帰台して台湾大学講師	1952.7 フランス・パリ大学に留学(1954法学博士号取得)
	1954 台湾大学法学部副教授に就任
	1956 キッシンジャーの招待で米・ハーバード大学のセミナーに参加
1957.7 農村復興聯合委員会技士、台湾大学副教授(34歳)	1957 台湾大学法学部教授に就任(34歳)
1961.6.16 日本に亡命していた王育徳(台湾独立建国聯盟に 関わり後に明治大学教授)を訪問→独立運動家から も水面下で信頼を得る	1961.9 国民党政権代表団顧問として国連総会出席
1965.9 米・コーネル大に留学	1964.9 <u>謝聡敏・魏廷朝とともに「台湾自救運動宣言」を 作成・印刷したところで逮捕(41歳)</u>
1968.7 農学博士号を取得して帰台、台湾大学教授に(45歳)	1965.4 懲役8年の判決
	1965.11 特赦で釈放。以後、特務の監視下
	1970.1.3 香港、バンコク、コペンハーゲン経由で1.5にス ウェーデンに脱出(46歳)
1971.10 中国国民党(国民党)に入党(48歳)	1970.9 米国に移り、ミシガン大学客員教授に就任
1971.10 中華人民共和国が国連加盟し「中国の代表権」、台湾は国連脱退	
	1972.2 台湾独立建国聯盟主席(48歳、期間は1年間)
1972.6 蔣経國が行政院長就任、李登輝を農政担当の政務委員に任命 1972.9 田中角栄が周恩来と会談、中国と国交樹立、台湾とは断交	
	1973 オハイオ州のライト州立大学客員教授に就任
1975.4.5 総統の蒋介石が死去、副総統の嚴家淦が昇格、蔣経國が国民党主席 1978.5.20 蔣経國が第6代総統に就任	
1978.6.9 台北市長に就任、台湾大教授辞職(55歳)	
1979.1 米国が中国と国交樹立、台湾とは断交 1979.4 台湾関係法制定	
1979.12 国民党の中央常務委員に初当選	1979.2 米国議会公聴会で「台湾関係法」について証言
1981.12 台湾省主席に就任(58歳)	1983.2 米国議会公聴会で戒嚴令解除など台湾民主化につ いて証言
1984.5 蔣経國が第7代総統に就任、李登輝は副総統に就任(61歳) 1986.9 初の野党、民主進歩党(民進党)が成立 1988.1 蔣経國が死去、李登輝は第7代総統(代行)に昇格	
1988.7 国民党主席に就任(65歳)	
1990.5 総裁選で第8代総統に就任(67歳)	
1990 李登輝が彭明敏を「国是会議」に招待するが辞退	
	1992.11.1 <u>22年ぶりに台湾に帰国(69歳)</u>
	1995.2 民進党に入党
1996.3 初の総裁直接選で国民党の李登輝(54.00%)が民進党の彭明敏(21.13%)らを破り、第9代総統に就任(73歳)	
	1997 民進党を離党
2000.3 総裁選で民進党の陳水扁(39.30%)が国民党の連戦(23.10%)らを破り、第10代総統に就任 彭明敏は総統府資政に就任(6年間)	
2004.3 総裁選で民進党の陳水扁(50.11%)が国民党の連戦(49.89%)を破り、第11代総統に就任	
2008.3 総裁選で国民党の馬英九(58.45%)が民進党の謝長廷(41.55%)を破り、第12代総統に就任	
2012.1 総裁選で国民党の馬英九(51.60%)が民進党の蔡英文(45.63%)らを破り、第13代総統に就任	
2016.1 総裁選で民進党の蔡英文(56.12%)が国民党の朱立倫(31.04%)らを破り、第14代総統に就任	
2020.1 総裁選で民進党の蔡英文(57.13%)が国民党の韓国瑜(38.61%)らを破り、第15代総統に就任	
2020.7.30 李登輝死去(97歳)、彭明敏は葬儀委員を務める	

追記 1

李登輝さんの京都帝国大学での恩師は柏祐賢(すけかた: 1907-2007) 先生(当時は助教授)ですが、ご子息(二男)の柏久(1947-2020)元京都大学教授による著書



(李5)『李登輝の偉業と西田哲学—台湾の父を思う—』

が2019年に上梓されました。編集人は不勉強のため、西田哲学を根幹とする本文はまだ十分に理解できておりませんが、「序」や「おわりに」など、余命が少ないことを自覚した柏久さんが正に遺言のように言葉を選んで表現しておられ胸にせまります 産経新聞出版 (2019)

(柏久さんは李登輝さんを追うように2020年11月22日に亡くなりました)。本書には、(李1)の著者の河崎眞澄さんによる

『李登輝・前総統の日本訪問同行記』 (訪日は2004年12月27日-2005年1月2日)

『永遠に二三歳のまま、僕は柏祐賢先生の学生だ—「李登輝の偉業と西田哲学に寄せて」』

が掲載されています。柏久さんは

『産経新聞』に「李登輝秘録」を登載中で忙しい彼に寄稿をお願いした。彼は快く引き受けてくれて原稿が届いた。届いた原稿を読み、私は涙が止まらなかった。というのは、その原稿が単に本書を締めくくるだけのものではなかったからである。

と表現しておられます。なお、2004年12月31日には柏先生(当時97歳)宅で李さん(当時81歳)との61年ぶりの再会が実現しますが、その前に計画された京大キャンパス入構は、大学当局から出された公権力を入れない (SP警護なし)という条件のため、残念ながら実現しなかったことを付記します。

追記 2

彭明敏さんには奇跡の台湾脱出劇があり、その脱出を中心となって支えたのが日本でのグループであることは誇らしく感動的です。1972年に出版された彭さん自身による本(彭3)には

残念ながら、この計画には非常に多くの人々が関与しており、これら勇氣ある真の友人たちに危険が及ぶのを避けるために、現時点では脱出の方法についてつまびらかにすることはできない。しかし、政治亡命を認めてくれたスウェーデン政府以外には、どの国の政府の援助も受けていないことだけは確かである。

と語っています。

近藤伸二さんによる著書(彭1)にはこの脱出劇が詳細に述べられており、台湾青年社に参加していた宗像隆幸(1936-2020)さんを中心とするグループが国境を越えて忍耐強く周到に協力した賜であることが理解できます。なお、宗像さんには台湾独立問題につき多数の著書がありますので、ぜひ



文藝春秋 (1996) まどか出版 (2008)

ひご参照いただければと思います。その中の一冊「台湾建国——台湾人と共に歩

いた四十七年」によれば、1998年以前は

日本のマスコミで台湾に支局を置いていたのは、中国に支局を置くことを認められていなかった産経新聞だけであったが、この年（1998年）に読売新聞、朝日新聞、毎日新聞、日本経済新聞、東京・中日新聞、共同通信、時事通信、NHKも台湾に支局を開設した。産経新聞は三十一年ぶりに中国での支局開設を認められて（中略）このときまで産経新聞の読者以外の日本人は、台湾情報に触れる機会が少なかったが、日本のマスコミの支局が台湾に揃ったことで台湾情報が激増し、日本人の台湾に関する関心も急激に深まった。

ということです。

追記3

李登輝さん・彭明敏さんと現在の蔡英文(さい えいぶんTs'ai Ing-wen、1956-) 総統との関係につき、少し補足します。

(蔡1) 蔡英文、『蔡英文自伝』、白水社(2017、ただし原著は2011)

(蔡2) 張瀨(正しくは；静)文、『蔡英文の台湾——中国と向き合う女性総統』、毎日新聞出版(2016)

(蔡3) 近藤伸二、『米中台現代三国志』、勉誠出版(2017)

などが筆者には参考になりました。(蔡2)の年表によりますと、蔡さんは、台湾大学法律学科卒業後、米コーネル大学大学院やロンドン大学政経学院大学院に留学し、帰国後は国立政治大学や東呉大学で教鞭をとりますが、1992年には経済部国際経済組織顧問となり、以後行政院や国家統一委員会などの主要ポストを歴任し、2004年に民進党に入党します。

蔡さんの1990年代の活躍は、当時の総統であった李さんの目にとまり、1998年の兩岸政治ゲーム汪道涵(おう どうかん、中国側主席代表)・辜振甫(こ しんぽ、台湾側主席代表)会談の紅一点最年少の代表団員にも抜擢され、2000-2004年の民進党の陳水扁総統時代には行政院大陸委員会主任委員(いわゆる「小三通」実現の偉業)を経て、現在のキャリアにつながっていきます。李さんと蔡さんは党こそ異なりますが、厚い信頼関係で結ばれていたそうです。また、蔡さんが民進党に入党してから2年ほどは彭さんの総統府資政時代とも重なりました(なお、2016年の蔡総統からの就任要請は断って距離をおいているとのこと)。

謝辞

李登輝さんと彭明敏さん生誕99年の2022年1月、本稿のドラフトをご覧いただき、貴重なお話を聴かせていただいた(李1)(李5:部分)と(彭1)(蔡3)の著者河崎眞澄氏(産経新聞 元台北支局長・現論説委員兼特別記者、現東京国際大学国際関係学部特任教授)

近藤伸二氏(毎日新聞 元台北支局長・元論説副委員長、現追手門学院大学経済学部教授)

に謝意を表します。

編集人